

バタイユにおける火山のモチーフ

大木, 勲
駒澤大学総合教育研究部 : 講師

<https://doi.org/10.15017/7402173>

出版情報 : Stella. 44, pp.255-269, 2025-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



バタイユにおける火山のモチーフ

大 木 勲

ジョルジュ・バタイユが残した草稿の1枚には、作家名や断片的な短文で埋め尽くされ、その中央下部に「エトナの中心」との記述を読み取れるものがある¹⁾。エトナの名でまず想起されるのはロールとの登山やそこにまつわるいくつかのエピソードであろう。これを含め、火山の主題が明示的に扱われるのは作家活動の初期から第二次大戦前の時期に集中しているように見える。一方で、多岐にわたる読書の影響や後に展開される考察の源泉を認めることも不可能ではない。本稿では火山に関連する論説や夢想とその背景にある着想を改めて検討することにより、これらが備えていた射程を探る。

イエスウィウス

バタイユは後年、『ジュスティヌ物語あるいは美德の不幸』のための序文において「『ジュスティヌ』と『ジュリエット』が記述する諸本能は、今や市民権を有している」²⁾と述べた。ジュスティヌを巡る物語には計3つの異なる版が存在するが、その第3版である『新ジュスティヌ』においては、ある登場人物が「ある日のこと、胎内から炎を吐き出すエトナ山を眺めているときに、私はこの名高い火山になりたいと欲していた」³⁾との言葉で同一化の願いを口にしていく。あるいは、『ジュリエット』後半部でジュリエットがクレールウィルと共謀して放蕩仲間のボルゲーズを投げ落とす場面では、ウェスウィウス山が舞台に設定されていた。この名祖は作中でアペニン山脈を訪れた際、山岳の無秩序と暴力性を見つめながら、「おお、自然よ！ お前はなんと気紛れなのでしょう！そして、人間がお前に倣うことを望んではないのでしょうか？」⁴⁾と問いかけてもいる。

自然の炎を自ら駆使したいという願いは、時代を問わず確認される。それはまた父の権力による禁止の対象であった火に、権力の象徴そのものとなった火に触れる欲求として、プロメテウス・コンプレックスとも呼ばれている――

つまり空の火とは、人体の屹立がその終極を見る⁵⁾天の輝きにほかならない。だが私たちは他方で、プロメテウスの伝説がほかのどれよりも、たとえばイカロスの神話よりも明確に去勢コンプレックスに属するものであることを知っている（精神分析家たちは、父に対するコンプレックスにオイディプスの名を与えたのと同じくらいに当を得たものとして、このコンプレックスにプロメテウス⁶⁾の名を付けることもできたであろうと認めてさえいる）。

さらに、このような去勢不安のうちでの跳躍とその先に待つ同一化は、ガストン・バシュラールがエンペドクレス・コンプレックスと名付けた欲求、「火に対する愛と敬意が、生の本能と死の本能が結びつくような真のコンプレックス」⁶⁾にほかならない。

なお、このコンプレックスについて詳述する際、ジョルジュ・サンドに続く適例として挙げられているのはジャン・パウルであった。「たとえば、大地の子たる太陽が、溶解する山岳の噴火口から空へと投げ出される様を夢想するジャン・パウルの作品にも、同じように典型的な記述を認めることができよう」⁷⁾という一節では、小説『巨人』が念頭に置かれていると考えられる。しかしながら、「我々がまだポジリッポの岬を回航しないうちに、ヴェスヴィオの噴火口は、白熱する息子、太陽をゆっくりと天空へ投げいれ、そして大海と大地とは燃え立った」⁸⁾との表現だけを捉えるならば、単なる夜明けの光景を修辭的に描写したものとも思われる。一方で、他作品における「太陽がその輝きを数千の火を吐く火山から受けているように」⁹⁾といった物言いに、あるいは書簡に認められた「新たな長い仕事が私と私の力を飲み込んで、今やかろうじて私という火山の噴火口からこの頭を出すことができる程度なのです」¹⁰⁾などの比喩に照らすならば、火山が天と呼応し太陽へ至ること、そのような火山に創作活動中の自己をなぞらえていることはたしかに認められる。そして火山との同一化やこれを通した太陽との照応という構図は、バタイユが執拗に追い求めるものでもあった。

上述の構図を検討するにあたって注目に値するのが、Vésuve と Jésus を組み合わせた造語イエスウィウス (Jésuve) となる。言語的連想や宗教的な含意が明らかな一方で、その実態を思い描くことは容易ではない。1920年代後半に執筆された『太陽肛門』と『松果体の眼』草稿群に現れるこのイエスウィウスについては、アンドレ・マッソンによる同名のインク画が残されている以外の展開は

ついぞ見られなかった。イエスウィウスの名は、1927年に書かれて1931年に出版された『太陽肛門』で初めて用いられている。辟易するほどのスカトロジ的傾向ゆえに軽視されているとも思われるが、劣らず荒唐無稽な『松果体の眼』と並べて読むと、考察に値する奥行きが見えてくる。

2つの名の合成は何よりも綴りの類似に駆り立てられているが、『太陽肛門』を紐解いてほどなく「打ち捨てられた片方の短靴」¹¹⁾ というアトリビュートが配置されているように、伝説上の死にしばしば自己犠牲的な動機が与えられるエンペドクレスとの類推を探ることも可能であろう。イエスウィウスの観念は、同じくエンペドクレスについて取り沙汰された自然との合体を思わせる着想にもとづくものでもある――

そして私はこの顔がスキャンダルであると、この情熱がイエスウィウスによってのみ表されると明言することをためらわない。

地球は、肛門の役割を果たす火山群に覆われている。

この球体は何も食らわないが、ときおりその奥底の収容物を外へと吐き出す。¹²⁾

ミクロコスモスとマクロコスモスが鏡映し合うことで、噴火と排泄は相互にパロディのような関係を築きながらイエスウィウスの観念に内包される。これが個人のうちにおいて「精神に収められた観念を侵略することによって、スキャンダラスな噴出という力を与えるエロティックな運動のイメージ」¹³⁾ と化するであった。

最初期に書き綴られたこの発想の反響は、1940年代後半に書かれ1950年に刊行された『C神父』にまで認めることができる。同じく造語として複数の意味が込められる固有名詞を用いた神父による「シアニヌが、その荘厳な噴火口からシアニヌをするとき、夜は溶岩に満ちた腹となる」¹⁴⁾ との記述に含意されているのは、「腹と自然とを結び合わせる」¹⁵⁾ 情景に囚われていたイエスウィウスの発案者に似つかわしいスキャンダルを巻き起こす噴出である。その帰結として、火山的な噴出が一種の連結点となり、人体が地球のスケールを獲得する。しかし、「災厄としての革命と火山は、天体と愛を結ばない。革命の、火山のエロティックな爆発は天との対立状態にある。狂暴な愛と同様に、それらは繁殖機能と切り離されて生じる」¹⁶⁾ とも語られるとおり、これが太陽と接続されることはない。そのような噴出は煙炎を噴き上げ天に到達するのではなく、崇

高な玉座としての天と対立する。

ただしこのことは、イエスウィウスが太陽と重なり合うことを妨げはしない。「このようにして、愛が私自身の喉元で叫び出す。私は¹⁷⁾ イェスウィウス、焼き尽くすようでありさせるような太陽の下劣なパロディである」¹⁷⁾ との宣言を通して、『太陽肛門』冒頭に置かれた「私は太陽である」¹⁸⁾ という印象的な一文は、寄贈するのではなく収奪する太陽を念頭に置いたものであることが理解される。以降のテキストにおいても「前者の太陽（見られない太陽）が完璧に美しいように、見られる太陽は恐ろしく醜いと考えることができる」¹⁹⁾ などの表現で折に触れて示唆される太陽の二面性を潜在的な根拠として、イエスウィウスは人の子と火山と、この見つめられる太陽になるのであった。その二面性とは「桁違いに魅惑的な仕方で有機体としての人が抱く最も際立った渴望を表現する」²⁰⁾ イカロスの上昇に解説を加える際に展開されるものでもある。「この神話は何よりも墜落の神話であり、狂乱や決定的な卑しさも表していることを忘れることはできない」²¹⁾ や、「この神話は明らかに太陽を2つに、イカロスが昇る際に光り輝く太陽と、イカロスが接近しすぎたときに蠟を溶かして彼の脱落を、叫びをともなう墜落を引き起こす太陽とに区分している」²²⁾ という記述からは、聖性に備わる純と不純にも等しい両義性を見てとることができる。叫びと墜落を誘発する、正気を失った不浄な太陽の形象がこのように繰り返し提示されているが、『太陽肛門』のイエスウィウスは、天に向かうとはいえその溶岩で大地を覆い尽くす火山の光景にこそ強く紐づけられているとも思われる。そのためここでは前景に立つことがない墜落の主題について考えるにあたり、対となる『松果体の眼』を参照することが有益となる。

松果体の眼

つまり太陽肛門とは人体に備わった太陽のような器官であるが、それは卑しい太陽の性質を体現するものである。同時期に書かれた草稿群においては、この器官に劣らない重要性が頭頂部の眼に与えられていた。2つのテキストは両者で引き継がれるイエスウィウスの観念によって結ばれているが、その間には確かな進展も認められる。とくに、後者の草稿群において天への墜落というテーマが明言されていることが際立った差異の1つとして注目される。以下では断片的なその記述を整理しつつ、この主題の意義を検討したい²³⁾。まず「地球は、

その中央で虚空に向けて開かれた眼が火山のようで、かつ湖のようでもある剥き出しの頭蓋さながら巨大に佇む」²⁴⁾と要約される松果体の眼にかんする基盤を構成する発想は、ほかならぬ「イエスウィウス」と題された草稿において詳述されている――

私は頭頂部の眼を噴火状態にある恐ろしい火山として、まさに尻と排泄物に結びつく怪しげで滑稽な性質とともに思い描いていた。眼とは、間違いなくまばゆい太陽の象徴であり、私が頭蓋の頂に想像していた眼は、その輝きの頂点にある太陽を凝視するよう定められているが故に、必然的に燃え上がる。古代人の想像力は太陽的な動物としての驚に、太陽を正面から凝視する能力を与えていた。²⁵⁾

ひとつの眼が噴火する火山のように燃え上がる情景を手掛かりとしている点では、『太陽肛門』との本質的な差異は見出しがたい。ただし『松果体の眼』においては去勢不安への言及がより明示的に行われている。たとえば前エディプス期からエディプス期への移行を読み取るには根拠が乏しいとしても、心理的次元での探求は認められよう。

また、太陽肛門と松果体の眼の形態的な差異を考えるのならば、対象を同じくしながらも方向性が異なる点をこそ指摘できる。前者は直立した人間においては下方に向けられている。そのため、180度回転させることで太陽へと向かう。他方、頭頂部で開かれる眼の含意する志向性が、このねじれを解消すると見なすことも可能だろう。その対象となるのがやはり盲いさせるような、卑しさを極める太陽であるとしても、身体を通して天体と照応する欲求は、双方のテキストで変わることなく披露されている――

ともかく松果体の眼をただ思い描くことに対する度を超した関心は、自身が太陽になるという抗いがたい羨望として必然的に解釈される（盲いた太陽か盲いさせる太陽かは問題とならない）。驚の場合も私自身の想像の場合も同様に、直視する行為は同一化に等しい。²⁶⁾

ここで語られるのは、至高の存在として信仰の対象になる太陽でなく、まさに見つめられる太陽との同一化であり、この観点からも「私は太陽である」、「私はイエスウィウス」という宣言がそのまま当てはまるように映る。

そのうえで両者の違いは、同一化に先立つ眩暈の表象によって導入される。火山様の眼を通して重なり合う頭部と地球は、恐怖と眩暈のうちに光源へと引き

寄せられるのであった——

象徴的な意味において、松果体の眼は頭蓋の牢獄から荒々しく逃れ出そうと努める、嫌悪を催すような猥雑性として定義される。ただしその結果として頭蓋冠の頂点に眼が発現する瞬間、さらに言えばこれが青空の広大さを前に際限なく開かれる瞬間に、恐るべき眩暈によって今度は身体じたいが落ちながら、喚きながらそして旋回しながらこの広大で恐るべき天の底に至るまで逃れ出ていくような幻想がもたらされる。²⁷⁾

頭頂部の眼を通して個体の枠を超えようとする想像力は、天空と相対して回転性の眩暈に見舞われる。この眩暈は、イカロスの墜落と同様に叫びをともなう下降運動を引き起こすが、バタイユにおいてはそれが天の底へ向かうものとして語られている。これは「井戸の底の死体よろしく天の底に位置する太陽は、腐敗が示す亡霊のような魅力をもってこの非人間的な叫びに応える。広大な自然はその鎖を砕き、境界のない空虚のなかに崩れ落ちる」²⁸⁾と表現されるとおり、墜落する先としての太陽が位置する底であった。また当該描写の源泉となっているであろう「暗殺者の酒」の妻が埋葬される場所であり、大地の腹でもある。このような背景をもとに、イエスウィウスとして、空に向かって、あるいは底に位置する太陽に向かって落下する図式が描かれるのであった。ちょうど『エンペドクレスの死』を執筆していた時期のヘルダーリンが書き残したとおり「深みに落ちるのと同じように、高みに落ちることができる」²⁹⁾のであり、バタイユにおいてこのような空想は、言わば自己の拡張によってもたらされるものであったと解釈することが可能となる。

『太陽肛門』においても、幻想がもたらす自己の拡張という機能は明確に認められる。そこでは統合と分裂に関わる愛または愛欲の要素が取り上げられるとともに、宇宙規模の愛と地上の愛が並行して描かれていた——

素早く回転する円盤さながらに空間を回っていて、その中心もまたはるかに大規模な円を描きながら移動している惑星系は、自らの位置から絶えず離れていくとしても、その回転を終えるとともにそこへと戻って来る。運動とは、一人の特定の存在に留まることが不可能で、ある存在から別の存在へと素早く移っていく愛の姿である。³⁰⁾

このような発想を受け継ぐ『松果体の眼』においては、自然との融合という主題がより前面に置かれ、「人が自らを、もはや同質的な過程、すなわち必要に駆られた不憫な過程の一瞬としてではなく、引き裂かれた自然の内部にある新たな

断裂として思い描くとき、その者において悟性から生じる均質的な語法では彼を救うことなどできない」³¹⁾ こと、反対に幻想の苛烈さのうちに人が自らの姿を認めることが示されている。つまりは、断裂として自然の裂け目と融合することを足掛かりに自己と外界との相似が成り立つことになる。このように少なからず突飛な幻想を構成する理論上の基盤が具体的に提示されるのは、むしろ以降の論考においてであった。そこでは、墜落という運動が投影の概念と対になって扱われている。

投入と投影

そのような展開の出発点が、1936年に発表された「迷宮」における次の所見である——「存在はこの世においてあまりに不確かであるために、私は望むところに、すなわち自己の外に、存在を投影することができる。ぎこちない、未だ自然の策謀の裏をかくこともできない一人の人間が、自己のうちに存在を閉じ込めている」³²⁾。そしてここで語られる投影の意義は、1940年の「星を食べる人々」において最も明瞭かつ簡潔に示されている——

星を食べる姿を自らに思い描く者は、たとえ小さな焼き菓子の大きさと愉快に想像するのだとしても、易々とその手に掴めるものの尺度に星を引き下げる意図を持ってはいないだろう。天空のまばゆい奥深さのうちに迷い込むまで自らを拡大させる意図を持っているに違いない。³³⁾

火の幻想と同じように、何かを媒介として対象に触れることや食べること、自らのうちに取り込むことは対象を存在に閉じ込めるのではなく、反対に存在を解き放つ。まさしく「ある天体を人間の矮小さに適合させることが可能でないとしても、人間がこれを利用して自らの惨めな限界を打ち破ることに制約はない」³⁴⁾ ことを教えるものである。

拡大や拡張による解放という発想は、たとえば上述した論考の題名が間接的にであれ連結を窺わせる「プロメテウスとしてのファン・ゴッホ」などでも示されている——

この太陽という奇妙な選択が、不合理な誤解を引き起こしてしまっているといけない。ファン・ゴッホの絵画は、プロメテウスの飛翔におけるのと同様、遠く離れた空の至高者の賛美を意味することなどなく、ここにおいて太陽は捕らわれているために支配者でもない。天体の大変動が示す彼方の力強さを認識するにははるかに遠く、あらゆる変

化を免れている単調な地表をさらに広げさえすれば十分であったかのようにして、地球は、父親の放蕩によって突如として目を奪われ退廃した娘さながらに、今度は自らが大変動に、爆発的な喪失に、閃光に酔う。³⁵⁾

ゴッホの絵画は太陽を称揚する代わりに捕らえているものの、これを地上や画布に留め置くことを意味してはいない。反対に、静止した地表に立つ人間が捕らえられた太陽を通して認識上の領域を拡張し、天体の運動に参画するのであった。

こうして複数の論考を並列して眺める場合に一際目を引くのが、共通して現れている投影 (projection) の語となる。この名詞や派生元である動詞は、『松果体の眼』においても幾度か用いられていた。地上の植物は、重力源から離れる方向へと伸びている。松果体の眼を通して自然と融合する人体は、もちろん地表から逃れることはないものの、新たな想像領域を獲得するのである――

人類だけが、ヒト上科の表情がその痛ましくて卑しい性質を示すような努力と引き換えにして動物特有の穏やかな水平性から自身を引き剥がすことによって、植物のような屹立状態を自らのものとし、ある意味において、天によって引き寄せられることを可能とした。

このようにして、広大な地域を備えた地球、至る所で地表から逃れて絶えず自らを捧げ破壊しつつ、あるときは光に溢れあるときは夜となる天の空虚へと自らを投影する植物群に覆われた地球はまた、笑う人間の、引き裂かれた人間の総体を、空間というこの失望を招く広大さのうちに引き渡す。³⁶⁾

上記の引用における「天の空虚へと自らを投影する (pour se projeter vers le vide céleste)」は「身を投げ出す」、「飛び込む」と解釈することが通常と思われるものの、自らを投影することにも等しい。さらに「こうして松果体の眼は、眼球が備える通常の視覚の水平的な体系から離れ、涙の後光のようなものに取り巻かれて、樹木の眼として、あるいはむしろ人のような1本の樹木として発現する」³⁷⁾と言われるとおり、この類推から人が個体の枠を超えて植物や動物の尺度を獲得するのであった。そして太陽を見つめる鷺との同一化もまた、「事実、子午線上の太陽は人間が抱く衝動の、ほかのどのような投影よりも際立った投影を招く。ただしこれは物質的な形をとらず、神話の自由度においてのみ適切な表現を見出せるようなものであるのだが」³⁸⁾ との一節から読み取れるように、ここで示唆された思考体系を根拠としている。

これら一連の観念的な表現の豊かさを踏まえるならば、松果体の眼に特有の着想とそこに端を発する自由な伸張は、高次と低次の融解や上下の転覆に留まらない影響力を備えていたことが把握される。太陽に向かって落ち続けている天体に人が留め置かれているように、太陽もまた銀河の中心に落ちている。太陽はもはや上昇の終着点ではなく、とはいえ地上に引きずり降ろされるのではなく、落下先である天の底として提示されるのであった。そこから発して太陽に飛び込み自己を投影する情景が思い描かれるのであるが、ただしそれは先に見たとおり無欲なものでも、静謐なものでもなく、不安や恐怖を与えずにはいないことが示されている。

『クリティック』誌に掲載された1951年の短い記事「レオナルド・ダ・ヴィンチ」のなかで、バタイユは近い時期に出版された書籍を典拠に、「彼が岩山に登っていると、不安を抱かせるような洞穴の入り口を認めた。そこへ入るのに恐れもあったが、自制することもできなかった。直面した障害、すなわち手の皮を剥ぐようなぬかるんだ岩々があるにもかかわらず」³⁹⁾と描写しつつ画家の幼少期の体験を辿っている。そしてこれに続けて、1人称で記された「いつか私が二の足を踏んだ際、突如として2つのものが私のうちに生じた。恐れと欲求、つまり薄暗く不穏な空洞への恐れと、それが何かしら驚異的なものを暴き出しはしないかを確かめたい欲求である」⁴⁰⁾という文章を引くことにより、未知の引力と斥力に読者の目を向ける。

何よりもこの論考内の記述は、1940年頃に書かれた「友愛」に見られる情景と共鳴している。そこでバタイユは、炎を上げる噴火口を逃れて洞窟に入り込む夢について説明を加えていた。「常にそれは恐れられると同時に求められる死、その本質が、夢において接近可能となるこの空虚な大きさとこの耐えがたい笑いからなる死であった。常にそれは跳躍を進言する死、完全な黒としての未知に結ばれる力強さであった」⁴¹⁾と示唆されているように、この類の夢の対象を巡って取り沙汰されるのは、同じく不安をとまなう自己投影となっている。このような恐怖と欲求こそ、火を恐れ希求するプロメテウス・コンプレックスに例えられるものである。そして去勢不安のうちで光源へと飛び込むことは、先に述べたとおり同一化を実現する契機となるのであった。「切り落とされる恐怖のうちで血を流す結末を引き起こそうとする子どもは、雄々しさの欠如を示してなどまったくいない。反対に、力の過剰と狂気の発作がこの世で最も鋭利な

もの、すなわち太陽の輝きの方へと盲目的に彼を投影するのである」⁴²⁾ との見解が雄弁に示すように、恐怖と欲求が天への墜落を引き起こすと解釈することが可能であろう。

身体と器官

また、松果体の眼にまつわるもうひとつの重要な点として、この眼が直接に太陽を見るものであると同時に有用性から切り離された器官である事実を挙げることができる。そしてここにおいて、『太陽肛門』から引き継がれたイエスウィウスの観念が、言うなれば器官なき身体を、部分として固定されない全体あるいは内在的な実体を思わせるような射程を垣間見せる。これについて、「器官なき身体を仕立て上げるならば、人をすべての自発運動から解放し、真の自由を手にしたことになる」⁴³⁾ と語るアントナン・アルトーは次のように説明を加えている――

身体は身体であり／単独で／器官を必要としていない／身体はけっして組織体ではない／組織体は身体の敵であり／私たちが行う物事は／ひとりでに起きる／いかなる器官の助けもなく／あらゆる器官は寄生体であり／寄生的機能を備えている／そこに存在すべきではない／存在を生きさせる目的の。／器官は食糧を諸存在に与えるためだけに作られた／一方の諸存在はその原則において断罪されており、いかなる存在意義も有していない。／人体の本当の器官が未だ構成されても配置されてもいないため、現実には未だ構築されていない。⁴⁴⁾

このような観念は、むしろ身体の中の諸器官に耽溺するバタイユが重視する排出や非生産的消費とは縁遠いようにも思われるが、翻って考えるならば、排泄物とは消化残渣である。醜悪で目を背けさせるような機能が人体に備わっている事実を含めて卑しい器官という地位を与えられているとしても、排泄に至る器官は、完全な保存を意味することもなく、完全な消尽を意味することもない、生存という有用性に資する機能にはかならない。

対して、「繁殖機能と切り離されて」いるイエスウィウスは、太陽のパロディであった。そのあり方は、1938年の論考「天体」に見られる「自らが属する系の中核である太陽のような星は、光と熱という形で、空間を介して実体の一部を放射している、すなわち絶えず投影している（このように消費される著しく重大なエネルギー量が、天体の実体そのものが内部で恒常的に消失することに

よって生じていることもある)」⁴⁵⁾との記述と響き合うように思われる。太陽は熱と光を噴出し投影している。そしてその熱量は、自らの一部の消尽として受け止められる。このような太陽は、「神話的に自らの喉を掻き切る人間によって、ひいては頭部を欠く人の形をした存在によっても表されてきた」⁴⁶⁾ 事実とも相まって、たしかに有用性の器官とは断絶している。

これを受けるように、マッソンが描いたアセファルのデッサンでは頭の位置に噴火口が置かれている。同じくマッソンの手になるイエスウィウスにおいても炎を噴き上げる火山が中心にあり、右端にはオートマティスム作品を思わせる線状の形象が描かれている。これを人に見立てた場合、その両手足には傷痕にも似た印が見え、頭部にあたる箇所には太陽さながらの光帯を認めることができるのであった。そして松果体の眼による投影がこれら自然との一体化を可能とし、思考の展開を許している。バタイユの想像においてはあくまで人の形が保たれるという違いはあれど、これを突き詰めるのならば、このような空想はエンペドクレスが語った器官なき神性を想起させずにはいない。

ロマン・ロランはエンペドクレスを引用しながら、次のように述べている。「無限の神は神人同形という想像への隷属を絶った。「神は器官も、手足も持たない」。果てがなく底もない意識、完全な意識であり、そこにおいては個々の存在が抱く熱性の不安は、無限の調和と友愛という至福のうちに消え去る」⁴⁷⁾。ここで問われているのは、まさに世界のあり様と個別的存在との照応である。他方のバタイユにおいては、投影を通して身体の果てを拡張すること、あるいは無涯のものであるかのように外延化することで、神話に匹敵する放縦によってのみ描かれ得る心象が自らのものとなる。この超克の対象を想定するならば、身体という枠に起因する主体性、あるいはそれにともなう不安となるだろう。以上のように考えたとき、この外延化こそ、イエスウィウスによって繋がれた『太陽肛門』と『松果体の眼』が以降の作家活動にもたらした影響であると結論づけることができる。またこのような観点から、『有罪者』中の記述が一層目を引くものとなる。

死別から1年後、ロールの墓を訪れるバタイユは1937年のエトナ登山を想起し、同様の心持ちで歩みを進める。それは、松果体の眼とともに想起される苛烈な自然へと限りなく接近する体験でもあったことが、「夜明け頃、巨大で底なしの噴火口が控える山頂へ到着した。私たちは疲労困憊で、言うなればあまりに

奇妙であまりに惨憺たる孤独のために瞠目していた。それは引き裂かれる瞬間であり、そのとき私たちは広大な傷口に、私たちが息をする天体の亀裂に身を寄せている」⁴⁸⁾ という描写からも確認される。ただし、これに続けて語られる鮮明な記憶が証言するように、この登山は何よりも恐怖の体験として植えつけられてもいた。「風は冷たく轟音を立て、火山の頂上は恐怖に満ちていて、それはかろうじて耐えられるほどであった。今では、自然の非-私がこれほどの猛威をもって私の喉元に襲い掛かってきたことはついぞなかったと感じられる」⁴⁹⁾ と回想される際に経験した自然との隔絶にも等しい不安を抱きながら先を目指す。

しかしながら、天体の亀裂がもたらす恐怖は、喜びの前触れとなるものでもあった。その様子は、以下の言葉で詳述されている――

その前に到着すると、私はもはや何も理解しないまま自分の両腕に痛みを感じた。そしてこの瞬間、まるで私が茫漠としたまま分裂し、彼女を抱きしめているかのようだった。この腕は私自身の周囲で消え去って、彼女に触れて彼女の空気を吸い込んでいるように思われた。恐るべき甘美が私をとらえ、それは突如として、まさしく私たちが互いを前にしたときのように生じていた。2つの存在を隔てる障壁が取り払われたときのように。⁵⁰⁾

ここで示されるのは、未知を前にした不安のなかで踏み出す者が個という枠から、存在を地上に留め置く重力から、つまりは天と地または此方と彼方との径庭を規定する人間の条件から、一瞬とはいえ逃れる光景であった。この様子は、続く記述においてより理論的な説明を加えられている――

昨日私が遭遇したことは、そのほかのより漠とした、あるいはより非個人的な形で生じる知覚不能なものとの出会いに比べても、劣らず燃え盛り真正で、諸存在の運命にとっての意味を備えたものであった。存在は夜を通して存在から存在へと燃え上がり、各人を閉じ込める牢獄の壁を愛が崩落せしめたからこそ一層燃え上がる。だが、2つの存在が、無限のもたらす卑俗さや単調さを逃れるとともに互いを認める契機となる破れ目以上に重大なものとは何であろうか。⁵¹⁾

ここにおいて孤立を打ち消す要素は、一種の器官なき存在によって体感される愛として描かれている。これがエトナ登山の記憶に並べて語られていることも示唆的であろう。投影によるスケールを問わない身体の拡張は、自由な想像の領域に留まるとしても、孤立を解消する愛、愛欲あるいは友愛を作動させるの

であった。それが永続するはずのないものであることは論を待たないが、言うなれば1920年から語られた諸々の発想が到達した地点でもあり、これが潜在化されてそれ以後の活動を支えていると解することも可能となる。

ここまで見てきたように、人体と火山の重ね合わせから出発した思考は、投影や拡張を通して統一性を保ちながらも展開を見せていった。さらに分析を進めるためには、火山のモチーフとは直接に関わらないため割愛したものの、以上で検討した論点や主題と密接に結びつく同時代の作品群についても改めて考察する必要がある。たとえば『太陽肛門』の「噴出の力が堆積する場となるような者たちは、必然的に低い位置を占めている」⁵²⁾ という一文に込められた着想は、『社会批評』誌におけるファシズム論や『アセファル』での分析を経由して『空の青』に至っている。足許に広がる天への墜落のイメージが山場となるこの小説については、『ミノトール』誌におけるマッソンとの共作が窺わせるとおり、深淵としての空を前にした眩暈など、発想の境界が曖昧になるほどに分有され相互に影響している部分も少なくない。以上の題材については、とりわけ1920年代から提示されていた墜落や投影にまつわる情景に着目しつつ、その発展も含めてより詳細に検討することが望まれる。

註

- 1) Voir Stéphane MASSONET, «L'ampleur d'un volcan», *europe*, n° 1121-1122, septembre-octobre 2022, p. 7 ; Jeremy BILES, *Ecce Monstrum : Georges Bataille and the Sacrifice of Form*, New York : Fordham University Press, 2007, p. 133.
- 2) SADE, *Justine ou les malheurs de la vertu*, Paris : Jean-Jacques Pauvert, 1955, p. XV.
- 3) SADE, *La Nouvelle Justine ou les malheurs de la vertu*, *Œuvres complètes*, t. II, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1995, p. 777.
- 4) SADE, *Histoire de Juliette*, *Œuvres complètes*, t. III, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1998, p. 698.
- 5) Georges BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *Œuvres complètes*, t. II, Paris : Gallimard, 1970, p. 45.
- 6) Gaston BACHELARD, *La Psychanalyse du feu*, Paris : Gallimard, coll. «folio essais», 1985, p. 39.
- 7) *Ibid.*, p. 40.
- 8) ジャン・パウル『巨人』（古見日嘉訳）、国書刊行会、1997年、557頁。

- 9) ジャン・パウル『ヘスペルスあるいは四十五の犬の郵便日』(恒吉法海訳), 九州大学出版会, 1997年, 28頁。
- 10) Franklin CARTER, «Richter's Correspondence with a Lady. Some unpublished Letters», *Transactions of the Modern Language Association of America*, vol. 1, 1884-1885, p. 18.
- 11) BATAILLE, *L'Anus solaire, Œuvres complètes*, t. I, Paris : Gallimard, 1970, p. 82.
- 12) *Ibid.*, p. 85.
- 13) *Idem.*
- 14) BATAILLE, *L'Abbé C, Romans et récits*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2004, p. 702.
- 15) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 28.
- 16) BATAILLE, *L'Anus solaire, op. cit.*, p. 86.
- 17) *Idem.*
- 18) *Ibid.*, p. 81.
- 19) BATAILLE, «Soleil pourri», *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 231.
- 20) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 45.
- 21) *Idem.*
- 22) BATAILLE, «Soleil pourri», *op. cit.*, p. 232.
- 23) 天への墜落についての詳細は次を参照—— Laurent JENNY, *L'Expérience de la chute : De Montaigne à Michaux*, Paris : Presses universitaires de France, 1997, pp. 153-181.
- 24) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 28.
- 25) *Ibid.*, p. 14.
- 26) *Ibid.*, pp. 14-15.
- 27) BATAILLE, *Œuvres complètes*, t. II, *op. cit.*, p. 416.
- 28) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 27.
- 29) Friedrich HÖLDERLIN, *La Mort d'Empédocle*, Paris : Le Bruit du temps, 2025, p. 255.
- 30) BATAILLE, *L'Anus solaire, op. cit.*, p. 83.
- 31) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 22.
- 32) BATAILLE, «Le labyrinthe», *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 435.
- 33) BATAILLE, «Les mangeurs d'étoiles», *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 567.
- 34) *Idem.*
- 35) BATAILLE, «Van Gogh Prométhée», *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 499.
- 36) BATAILLE, «Dossier de l'œil pinéal», *op. cit.*, p. 26.
- 37) *Ibid.*, p. 27.
- 38) *Ibid.*, p. 39.
- 39) BATAILLE, «Léonard de Vinci (1452-1519)», *Œuvres complètes*, t. XII, Paris : Gallimard, 1988, p. 69.

- 40) *Idem.*
- 41) BATAILLE, *Le Coupable*, *Œuvres complètes*, t. V, Paris : Gallimard, 1973, p. 286.
- 42) BATAILLE, « Dossier de l'œil pinéal », *op. cit.*, p. 46.
- 43) Antonin ARTAUD, *Pour en finir avec le jugement de dieu*, *Œuvres complètes*, t. XIII, Paris : Gallimard, 1974, p. 104.
- 44) ARTAUD, *Œuvres complètes*, t. XIII, *op. cit.*, p. 287.
- 45) BATAILLE, « Corps célestes », *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 517.
- 46) BATAILLE, « Soleil pourri », *op. cit.*, p. 232.
- 47) Romain ROLLAND, *Empédocle d'Agrigente et l'âge de la haine*, Paris : La Maison française d'art et d'édition, 1918, pp. 26-27.
- 48) BATAILLE, *Œuvres complètes*, t. V, *op. cit.*, pp. 499-500.
- 49) BATAILLE, *Le Coupable*, *op. cit.*, p. 366.
- 50) BATAILLE, *Œuvres complètes*, t. V, *op. cit.*, p. 500.
- 51) *Ibid.*, pp. 500-501.
- 52) BATAILLE, *L'Anus solaire*, *op. cit.*, p. 85.